

常射之卷

二

一貫流射術常射之卷二

目錄

矢之部

的矢 圖六品祐

遠的矢

半的矢

卷藁矢

指矢 圖一品

繰矢

引目 圖二品

引目削様 圖一品 政在追加 祐方同

竹根引目 祐方追加 圖一品

四目 追加 圖二品

矢頭 圖六品 祐方追加

矧くるり 圖一品 祐方追加

柴矢

箭やがら箭

籐品

箭筈 圖四品

矢羽 圖二十七品

羽名所
圖三品

犬鷲
祐方追加圖三品

羽染様
祐方追加

矢矧
祐方追加圖二品

一貫流射術常射之卷二

矢之部

的矢

遺稿曰的矢ト云ヘル物古代ヨリアルヘシ平家
物語ニ競ハ火威ノ鉀着テ星兜ノ緒ヲシメ生物
作ノ太刀ヲ佩キ二十四指タル大中黒ノ矢ヲ負
ヒ瀧口ノ骨法ワスレシトヤ鷹ノ羽テ矧タリケ
ル的矢一手サシソヘタルトアリ乍さりながら去此物古今
ノ制同シカラスト見ユマツイタツキト云物ハ
今世ノイタツキニハ大二異ナルナリ則チ和名

抄ニ源祐方云平題和名以太都岐題ハ頭ノ如シト

アリ古代ノ伊多都岐ト云ヘル物ハ今云鋌根ナ

ト云カ如ク以太津岐ニ中心アリテ篋ヘサシ込

ミタル制ナリ其外ノ制ハ今ト大イニ不替とも氏箒

ナト篋箒ニシテ平題キワヲ一寸計沓卷くつかきねヲスル

是則平題ノ中心ヲサシ込故
ニ沓卷ヲセサレハ不叶也 惣體質素ナリト知

ヘシ近世摩登ままと矢ノ制ハ花飾ヲ専ラトシ節数ヲ

四節或說ニ的矢ノ節数ハ五節本式ナリ是木火
土金水ニ表稱シ四ツ節ニシタルハ土ハ中

央ノ位ナレハ四節ニシテ五節ニ相等ト云ヘリ
シカハアレト是ハムツカシキ説也取ヘカラス

ニシテ其有所ヲ双ヘニ手揃或ハ三手揃或杯云

手ト云ヘキ矢ハ的矢負征^そ矢^やノ上刺一手神頭一
手四目ナト也其外ノ矢ハ一手トハイフヘカラ

ス 箬ハ節箬 是ハ節箬ニテモ沼^ぬ多^た箬杯トハ違也
此箬ハ皮目ヲ残スニヲヨハス先細

二削廻シテ置ナリ^的矢ヲ節箬ニスルハ^{やがら}
繕ヒ成安キタメナリ故ニ削箬トモ云ナリ 箬^{やがら}モ春

白篋夏水煉篋秋冬ハ焦篋ヲ用ルヲ式トス羽ハ^{サハシ}

鷹鷲八熊鶴ナトヲ以テ上品トス其外異鳥ノ羽

ニテ矧^{こと}ヲハ畧也 或ハ的矢ヲ惣テマセハキニス
ルハ畧義ナリ一色ノ羽ニテ作

キタルヲ本式トスト 或ハ羽中ヲ金伯ニテダビ
小笠原家ニハ云ヘリ

金伯ヲキタル上ヲ漆以テ塗タル有是ヲタヒマ
ヒヌリト云其^余今世ハ花美專ラナレハ異様ノ

物多シト 又黒朱ナトニモ塗是ハ皆雨露ニヲカ
知ルヘシ

サレン^{こと}ヲ嫌ヒテ用ル所也猶世ニ有ル所ノ品

類異物アルヘシ驚クヘカラズ左二的箭二品ヲ

頭ス考フヘシ祐方云此的矢ノ条ヨリ羽名所ノ

ナリ温故之卷弓ノ条鏑矢ノ条ト互見スルニ温

故ノ卷ハ先生ノ晩年ノ作ニテ其說精シテ勝タ

リ此常射十六ヶ条ハ幼學ノ作ニテ竹林派ノ説

ニ拋ラレタリ其證拋ニハ文中ニ本式ト竹林派

ノ制ヲ云ヒ或説ニ云一説ニ云ト其本證出所ヲ

不顯記サレタル趣所々ニアリ是レ竹林派弓書

ノ文列也晩年ノ著述ニハ私ノ説ヲ本式ト云叟

或ハ其出所ヲ不記或説ニ云ナト書タル類ヲヤ

カマシク云レタリサレハ此卷ヲ見テ非トスヘ

カラス文列ハトモアレ先生ノ心ハ通シタレハ

疑ヘキモアラス先生ノ著述ニテ壯年ノ作ナリ

元來先生ノ一貫流射則ノ射式ハ小笠原ノ式ヲ

用ヘラレタリ又弓矢ノ故實製作モ十二シテ六

七八此家ノ説ヲ墨繩トセレタレ托家柄ノ説ニ

モ妄説少カラサレハ又用ヘサル叟モ少カラス

ト知ヘシ此的矢ノ制ヲ見ルニ竹林派ノ説ニテ

一貫流傳來ノ趣トハ小異アリ仍テ政在先生ノ
教ヲ所ヲ爰ニ追加ス的矢ノ制ノ見ヘタルハ
射御持長記ニ符也小中黒賞翫物也のこび箆に
とるへし羽切符也矢の黒翫物也のこび箆に
鷹羽なとにてはきたる矢とく射のさきに
るしからす鷹の羽はひしやく花を羽のさきに
白く残すへし高忠聞書に矢のこしらへ様の
事さはし箆たる事すけふしを正すへし祐方云
スロールハフナシテふしはすたるへしふしを
ふしの本なりはすはすたるへしふしを
ばけつるへし羽は眞鳥羽本なり殊にきり不可
用すけふしほとらひ三ふせ可然くつ巻を黒
くなるへしこのひ箆にもする也但略義也鬮的
なとの的はくるしからずこれもある式の鬮的
又は百手などの的はののごひ箆にては射ましき
也御所的などの的は申に不及不可然也弓法私
書に矢の事箆は継箆也節をぬるへしこのひ
箆白箆は略義也射の三ふし中を本とす羽中
は四節なとは略義也羽には小鳥羽大鳥羽切符

大中黒妻黒なと何も真鳥羽を付へし小中黒は
昔より賞翫也とて小射手などは斟酌あるへき
由江^{ゆえ}あり矢はがは^わはばたるへし雨ふりの用心
にうるしはきもあるへき也射付のふしと云は
的矢にかきりたる事也其外は^管す^節ふしたまへし
ト見へタリ此三書ハ小笠原家ノ説ナレトモ小異
アリ高忠聞書ニハサハシ籠トアレ^レ氏フシカケ
ヲ的矢ノ定制^トシタニヤ射御持長記ニフシカケ
弓法私書ニハ節ヲヌルヘシトアリ節ヲヌルハ
フシケナリ其外射御拾遺ニ的矢もふしかけを
ぬるか本也的出張記に的矢はふしかけぬりた
るか本にて候さはし籠も不^レ苦候乍去略義と心
得へしトアリ節カケヲ以テ的矢ノ本トシテ是
ニ順次セシスハシ籠ナリ其主ノ所好ヨリテハ
ヌクヒ籠白籠等ヲ用ヘシ又節モ三節ヲ以テ此
矢ノ定法トシタル^レ右三書其外的出張記ニ的
矢は三ふし籠にて候ふしの名所別紙に有ト見
へタリ三節ニ不可限小笠原家ノ定法ハ三節ナ
レ氏節数繁クホト籠張リ強シ既ニ保元物語ニ
爲朝ノ矢ハ三年竹ノ節近トアリ弓勢ニヨリテ

羽ハ鷹鷲ノ羽ヲ以テ最上トス則射御持長記ニ
モノニテ強弓ヲ好テハ用ヘカタキツスナリ又
節筈ハツキ筈也トアリ節筈ノ更ヲツキ筈ト云ハ
節筈ヲ此矢ノ節ト定ラレタレト此節筈ハ碎易キ
ノ説トハ異ナリタリ此説非ナリ不可用又筈ハ
トストアリ羽中ノ節ヲ揃ユル更ニテ高忠聞書
一ヶ所ノ節ハ揃タリ又弓法私書ニハ羽中ヲ本
ロヘル事ナリ今當ノ的矢ニモ余節ハ不揃ト此
ツケノフシト註シタリ正スヘシトハ此節ヲソ
ヘシトアリ又弓矢名所之記ノ的矢ノ圖ニモイ
ハ的矢にかきりたる事也其外はすけふしたま
射付ノ節ト云ナリ弓法私書ニ射付のふしと云
フシハ矢先ヨリ三フセ上ニアル節ニテ的矢ハ
高忠聞書ニハスケフシヲ正スヘシトアリスケ
ユルハ實用ニハアラ見物ノミニセル更ナリ揃
トモ五節四節ヲ用ヘシト云ル更ナリ又節ヲ揃
本ナレト其人ノ氣量ニヨリ不得止事畧義ナリ
モ五節又ハ四節篋ナトハ畧義也トアリ三フシ
ハ四節五節等ノ節近ナルヲ用ヘシ弓法私書ニ

羽切符也小中黒賞翫物也トアリ鬮的聞書ニ的
矢の羽の中きりう中くろ小中黒の事は殊にむ
かしより小中黒は用たる物也此三色本式的矢
に付へき羽也上賢抄に的矢の羽の事わしの羽
可然候きりふなと可有と見へタリ切符ハ鷹ノ
尾小中黒ハ鷺ノ尾此二鳥ノ尾ハ厚クシテシナ
ヤカナレハ的矢ニカラス何矢ニハキテ至テ強
シ故ニ尾ヲ以テ矢ノ羽ノ最上トハセリ風切ハ
強^{コハ}スキテ折ル^{コハ}テア^{コハ}リ布^却テ弱シ^{コハ}ホ^{コハ}ロ^{コハ}ハ^{コハ}薄^キテ損^{コハ}易^{コハ}
シヨリテ尾ノ次トセリ上賢抄ニわし鷹の羽を
も付候はれの的にはいか、に候トアリ尾ニ并^{ならぶ}
ヘキ羽ナレ^{コハ}尾ヨリ少シ次ナレ^{コハ}ハイカ、トハ
記シタリ岡本記ニ的矢惣してませはきに
事なし小笠原はりま守殿なともひと、せ阿波
へ御下向ありみな、ませはきの矢くせ事と
被^{おおせられ}仰候事也弓馬故實に的矢ませはきに
ゆめ、有ましき事也内々稽古なとの時はさも
有へき^{コハ}的矢に限らす能矢をませはきに
事はなき事也ト見へタリマセハキハ鷹鷺何鳥
ノ羽ニテマセ合テ矧タル矢ナリ則上賢抄ニわ

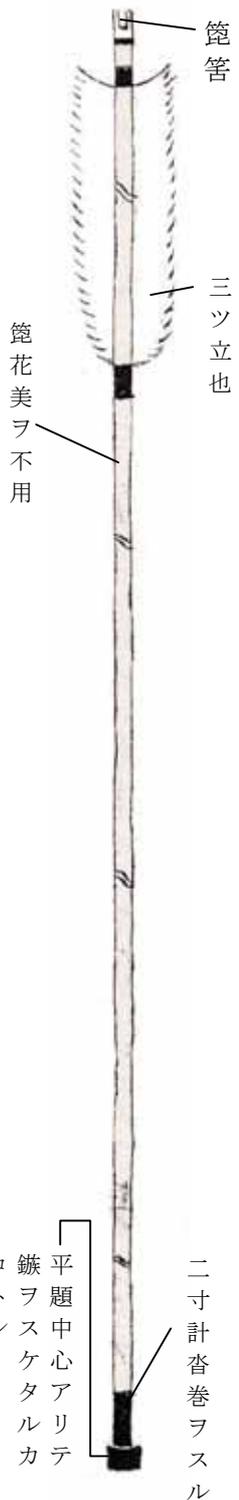
し鷹の羽をはきませても用候是は晴に如何に
て候又云三鳥合の時も弓すりに黒つはを一ッ
付候是も略義にて候トアリ古軍記ニハ破合テ
ハキタル矢トアリ則源平盛衰ニ白篋十四束ニ
伏ニ誘タル切符ニ鶴ノ霜降破合テ矯タル征^そ矢^や
平家物語ニ白篋ニ鶴ノ本白カウノ羽ワリ合テ
ハイタル矢ト見ヘタリ是レナリマセハキモ其
羽ノ取合ニヨリテハ甚タ觀美ナレ元來取集
メ羽ヲ以テ矧タル矢ナレハ^そ制ニテ時ト所ニ
ヨリテハ用ヘカタキモノナリ高忠聞書別記ニ
的矢の羽にうす黒を付る事有ヘからすさ、羽
くるしからすさ、羽とはたうの羽の事也この
鳥の羽をはざう、の羽と云也人の方よりさ、
羽などにはれん時はたうの羽と心得よこの鳥
の羽をさ、羽とてやる事有ヘからすさ、の
羽してやるへし、は、一尻といはす一
とりと云へしト見ヘタリウノ羽ハトキノ羽
ノ事ニテ今當唐鳥ト云鳥ナリザウノ羽ハ雜
羽ニテ何鳥ノ羽トハ不定サレハ鷹鷲ニカキラ
ス何鳥ノ羽ニテ矧ナリ少年者ノ的矢ナトニハ

染羽ニテモハクヘシ上賢抄ニ染羽ナト的矢ニ
付候事十四五ノ年來としごろ衆ハ自然付候ても被られ射候
也トアリ染羽ノ制下ニ出タリ又羽長ハ其主ノ
矢尺ヨリテ定ヘシ鬮的聞書ニ的矢の羽たけの
事根本は六寸也但籠により人によりて延縮の
事は見合テすヘシトアリ羽丈長キハ行勢鈍シ
矢尺ニヨリテ羽ノ長短ヲ究ム亶大傳ナリ是ヲ
定メンヤウハ矢尺ヲ五ツワリ一分ナリトヘ三
尺ヲ五ツワレハ六寸トナル此積リ以テスレハ合
好ノ羽丈ト知ヘシ又矧ハ椀ハキト弓法私書ニ
見ヘタリカハ矧ハマユミ皮ナリ則用害記ニか
ははきと云はまゆみにてはく事也トアリマユ
ミノ木ノアラカハヨハキ去レハ其下ニ白キア
マ皮アリ其皮ヲ取リ上ハキ下矧ニ卷クナリ此
アマ皮ニニセテ椀原ノ白紙ニテ卷キタルナリ
雨フリニハヌレテ損事易ケレハウルシ矧ニモ
用ル也弓馬故實ニうるしはきの矢を用る事有
とは的の時俄に雨のふる事ありその時射へき
爲なりトアリ弓法私書ニモ見ヘタリ今當モ漆
矧糸矧ニスルナリ色ハ赤クモ黒クモ青クモ定

リナシ其人々ノ所好ニヨルヘシ又筈巻上矧本
ハキノ長サ大永聞書ニ筈長筈巻二ツけらくびは
筈巻のひろさ半分也上はぎは筈長さ二ツもとは
きは筈長三ツなるへし是はうつほのみおひ征矢
の事也かふらのから神頭用事也但かふらのか
ら神頭は矢によりて見能よき様にあるへし此分に
てはあまり長かるへし矢笠然のからはけら
くひ筈巻の半分也筈巻のひろさ三分也但三分
に口傳有これあり之三分とは筈巻の籠まはりをとりに
其三分一を筈巻の長さにする也是を三分と云
ト見ヘタリ此大永聞書記者未詳小笠原ノ古書
ナリうつほのみハ空穂ニサス征矢おひ征矢ハ
籠ニ盛ル征矢也此二ツ征矢ノ筈巻上ハキ本ハキ
ノ事ハ委ク記シ的矢ハ筈巻ノ事ノミ記シテ上
ハキ本ハキノ事不記ハ征矢モ的矢モ同変ト見
ヘタリ是等ハ見物ノミニテ長トモ短トモ實用
ノサワリニナラサル事ナレハ兎角見タル所ノ
恰好ノヨキヲ可トスヘシ又クツ巻スル事高忠
聞書ニくつ巻をは黒くぬるへしトアリクツ巻
ハ本文ノ如ク板付ニ中心アリテサシ込ニシタ

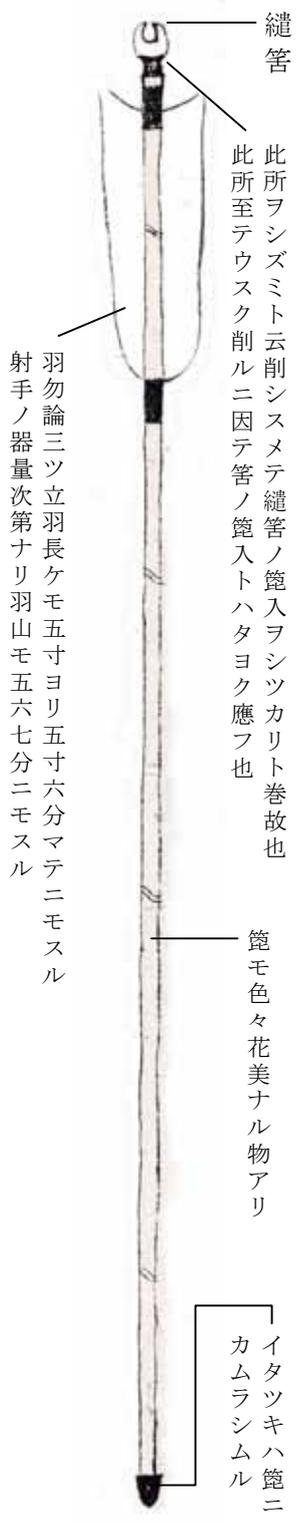
ト互シノ矢巻テも矢いたテケ小ルハル
ハ見タル板ニハノ先ノ矢先ハニハ
小見タル板ニハノ先ノ矢先ハニハ
異シル所ノ異ナルヘカラスサレハ
有テ竹制ハ一貫流傳來ノ赴ナレハ
ヲ林派ノ説
可ノ
悟

舊制



平題中心アリテ
鏃ヲスケタルカ
コトシ

今制

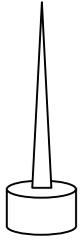


羽勿論三ツ立羽長ケモ五寸ヨリ五寸六分マテニモスル
射手ノ器量次第ナリ羽山モ五六七分ニモスル

今世ハ以太都岐ト云ル物モ籥口ニカムラシム冠
ル故ニ沓卷くつ(かさね)ヲセズシテモ篋碎ル事ナシ乍去古
ヘノ遺制ニテ今ノ板付ニモ沓卷シタルアリイ
マハ文字ヲモ板付ト書ニヤ鉄或ハサハリ杯ニ
テ張ル平板付瓶子形頭巾形椎形ノ類ヲ用ユ則
其品々ヲ左ニアラワス既ニ延喜式日梓弓一張
矢四具角大伊多都一具角伊多都伎一具木大伊リ
多都伎一具麻々伎各五十隻セキ爲一具々別功五十ニ
人鹿角本末各五十四隻伊多都鐵十二兩二令熟伎料
銅三令己上麻々伎鏃ト記セリ考フヘシ是等ノ
料用寮家物一

制今制ト大二異也大伊多都伎ナト云ルモノ今
 ノ矢頭ノ躰ナリ細伊多都伎ハソレガホソキナ
 リ麻々伎トハ何ニテモ鉄根スケタルヲ云麻々
 伎ハ継木弓木竹合セヨリ出タル詞ナリ鉄根ナ
 ドスゲタルガヲモイアワサル所アル故ナリ総
 テ今古ノ制カハレルト知ルヘシ喩ヘイカホト
 變変シタリト其實ヲ失フヘカラズ

古今板附ノ圖



平題ト云古ノ
イタツキナリ



瓶子へいし形カフヲ形
シヤカ頭トモ云



椎形少アサキ形ヲ
頭巾形ト云



平板付是ハ平題ノ遺躰
ナリ今ハマレナリ此形
上ノ二品ヨリ少シ古キ
制ナリ

○遠的箭

忠夫子遺稿ニ曰遠的矢

遠的ノ事ハ諸的
射ノ条ニ出ス

古代ニ

ハ聞ヘサル也

乍去太平記ニ遠的場タテニ立タ
ルト云事見ユ委クハ諸的ノ条ニ

出凡八九反計ノ遠間ヲ精ク射ムタメニソトム

ルことナレハ平生ノ小的矢ニテハ心ニ不任射苦

敷しきわぎ事故ニ篋ヲ強ク削リ火ヲ強ク入レ勿論節數
等ニ定リ

ナ羽モ何鳥ニ
テモツホ三羽ヲ矧キ羽長ケモ短クシ

テ三四分沓卷ヲスル根ハ輕キ板付ヲハムル又
カ

タキ木ニテ木鋒ノ如如筈ハスクハズ小筈ヲ入テ
ク作リスゲテモ可也弦ホトニク

ル塗ナトハ好ニ任スヘシ諸的ノ条ト合セ見ル
ヘシ圖ヲ出スニヲヨバズ

○半的矢

遺稿

半的矢半的ノ卷ニ是モ古ヘニ聞ヘズ右遠的ノ
委ク出セリ

半間ニシテ矢事ヲ精正ニナサン爲ナレハ其制

小的矢ト遠的箭ノ間制ナリ筈ハ焦筈勿論節數

ニ定リナシ筈筈或ハ續つぎ筈羽ハ何鳥ニテモ權

形ヲ矧ヤワラカナル長ケモ四寸又四寸五分ニモ

スルー一寸計沓卷ヲスヘシ根ハ板付也元來半的

ハ常ノ的矢ニテ射ヘキ事ナレとも射苦シキ故ニ
此制アル委ク半的之卷ニ出タレバ爰ニ圖ヲモ
ラシヌ

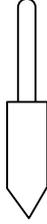
○卷藁矢 角木附

白篋五ツ節 或里篋ヲ用ユ里篋トハ深山杯ニ生
スル竹ニ對シテ云也是ハカタキ物

射ル矢ニアラサレ 箬ハ續つぎ箬箬好このみニ因ルヘシ
ハ里篋ニテ可也

但シ續箬 羽ハ何鳥ニテモ可也乍去鷹ノ石打下
本トス

出ス 或ハ鷹ノ蒼羽 或ハ石打ニ
テモ可ナリ ニテモ作ハ黒塗ナ

リ根ハ鹿角ニテ  加是ナル物ヲ作指込

テ沓卷六七分スル也 又水牛ニテモスル
是ハ見物ノタメ也 尤筒結 もつとも

ノ卷藁ノ事ヲ射ル矢ナレハ一手揃ヲ式トス羽ニ用ユ（陰陽）

是則延喜式ニ見エシ所ノ細伊多津伎ノ遺制ナ

ルヘシ又此物ノ畧制ニ羽ヲ付サル有俗ニ棒角

木ト云リ是ハ近世射込ト云ル物ヲ射ル矢ニ羽モ根モ付サル矢アリ是ヲ射込矢ト云

矢氏云是ニ類セリ

○指矢

差矢是モ遠間ヲ射ヘキ矢又矢數ヲモスル箭也

矢數トハ京都三十三間堂ニテ射事ヲ云此事下ニイタズ見ルヘシ 其篋ハ

細ク皮ヲ強クヲトシ灸篋筈ハ篋筈節數定マリ

ナシ羽ハ鴨ノ風切第二ノ蒼羽ヲ以テ長ク三寸

二三分二矧^{あずき}樺塗ニスル但シ羽中ヲ二寸計平^{からむし}芋

ニテ卷キ黒ク塗ル根ハ繰矢ノ如シ沓卷五六分

シテ黒クヌル但シ今世續穂ノサシ矢ト云モノアリ是ハ彼堂ニテ矢數射ニ矢ノ

サキノカタ數多碎ケ損スル故ニソレヲ繕フニ先細ニケツリタル竹ニテツキタルナリ素ヨリ

沓卷スルニヨハス是畧也指矢トハある或説ニ遠キ物ヲサシツ

ケテ射ルナレハサシヤト云矢行方也繰矢ニ對

スル名也ト云リ又野指矢ト云物アレド異制ニ

モアラズ此制ノ麿^そ相ナル物ト知ルヘシ即チ保

元物語平家物語太平記等ニ指矢ノ名見ヘタリ

圖左ノコトシ但シ石三本ニ見ヘシ指矢ト云ルモノ今世ノ如キ物ニヤツマヒラ

カ
ナ
ラ
ス



○線矢

遺稿ニ曰遠矢是ハ遠丁ヲ射ヘキ矢ナリ其制至

テ細籠ニシテ節數定メナシ 紀州高野山ノ竹ヲ最上トス或ハ籬ひじりタ

ケヲモ可トス元來細籠ヲ好ムト云ハ遠丁ヲ射ル爲ナレハナリ但シ常躰ノ矢竹ナトニ至テ細

キハ用ニ立サル故ニ右ノ如シ 火ヲ強ク入ル筈ハ籠筈根ハ輕

キ木ヲ鋏ノコトクニ削テ差入レ五六分平苧ニ

テ沓卷シテ黒ク塗ヘシ羽ハ鴨ノ風切第一ノ蒼

ノカタヲ付ル羽長ケ二寸五六分

矢東二尺七八寸内外ノ鈞合

リナ筈卷シテ矧ハ梓皮塗り也但シ上矧羽ノキワ

ヨリ筈先マテ長サ一寸四分計掛合篋中ニテ本

一寸二三分輕キ様ニスヘシ既ニ参考保元物語

新院ノ御所固ムル条ニ南都ノ衆徒ヲ召ル、事

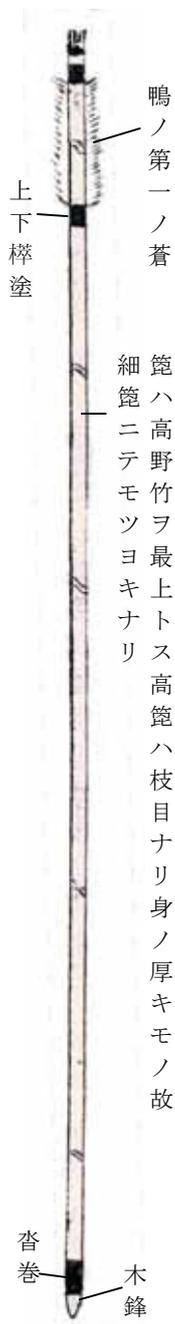
アリ興福寺ノ信實玄實等吉野十津川ノ指矢三

町遠箭八町ト云者共ヲ召具シテトアリ又平家

物語参考太平記杯ニ遠矢指矢ノ名見ヘタリ乍

去其頃モ今制ノ如キモノニテ有ケルヤラン不

詳今世ハ此矢ヲ繰矢とも云リ一説ニ是ハ遠間ヲ
 射ルニ舉上リニ射渡スユヘ矢行フクヲミヲ取
 テユクサマエグレルモノナレハクリヤト云文
 字ニ拘ルことニハ非スナシ矢ニ對スル号ナト、
 云リ其圖左ノ如シ



引目

遺稿曰引目ハ鏑同物ニテ鏑ノ有無ニテ其ハカ

鏑 矢ト並

チアルナリヘ見ヘシ墓目ノ號ハ古カルヘケレ

托三部ノ書

旧事紀古事
紀日本紀

古語拾遺等ノ正史ニ見

エス参考保元物語ニ鏑ヲ墓目托記セリ条ニ出

とも
鏑 矢ノ

又東鑑曰右大将家御時長沼五郎宗政只堅給御

引目於海道十五个國中可糺行民間無禮之由令

糺
いまに
よもぎ
宝

啓之間被重武備忝給一御引目于今爲蓬屋重寶

トアリ是等引目ノ名ヘシ所ナリ考ヘシ惣テ墓

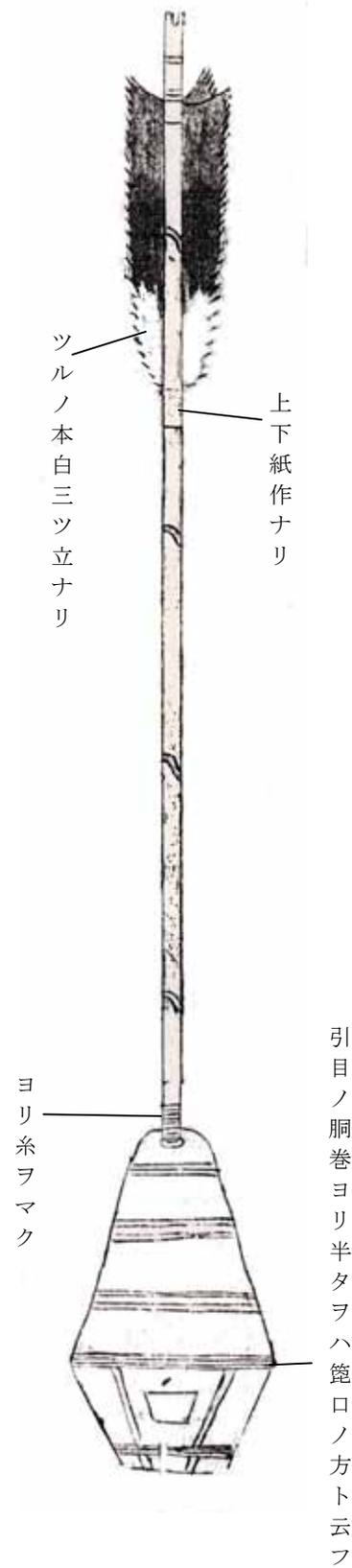
目ノ事ハ當流ノ大傳

祐方云爰ニ當流ノ大傳ト
アルハ當流ハ竹林派ノ事

ニテ竹林派射ニシテ容易ノ事ニアラス則五段
則ノ大傳ナリニシテ容易ノ事ニアラス則五段
五段トハ誕生城築犬追七傳七傳トハ右五段ノ
物笠懸流鏑馬是ナリ七傳外ニ矢入調伏ノ二
傳ヲ加フニワカツテ悉ク別記アルナリ右七傳
合七傳也ニワカツテ悉ク別記アルナリ右七傳
ノ内誕生トアルハ産屋ノ引目ノ事城築ハ移徒
引目ノ事ニテ射越ノ引目ト云ナリ矢入ハ古軍
記ニ矢合トアリテ敵味方兩陣互ニ戰ヲ始ン前
ニハ上刺ノ鏑矢ヲ射違ル事ナリ此三ヶ条ニハ
深ク意味アル事ニテ其氣量備ナレハ會得ナリ
カタシ一貫流射則ニモ大傳トアル所ナリ又犬
追物笠懸流鏑馬ハ騎射ノ式法ニテ馬ヲ自由自
在ニ馳セ馬上ニテ弓ヲ射ル稽古ノミニテ深キ
意味ナシ先生ノ射則ニモ其作法附属シタリ
秘事大傳ナトハアルヘカラス又調伏ハ世ニ調
伏ノ引目ト云モノアレト乍去引目ハ誕生ヲ根
坂モナキ事ニテ不取所也

本トシテ餘ハ是二次夕ヘシ故ニ爰ニハ先ツ産

屋ノ墓目畧制ノ一品ヲ左ニ頭ス猶委シキ事ハ
 別記ニアラサレハ會得ナリカタシ又世ニハ墓
 目ニ内封ナト云事アレト當流ニハ決シテトラ
 ス



引目ノ胴卷ヨリ半タヲハ籠口ノ方ト云フ

右墓目矢制セン様白篋五節

箆 氏ニ五節ナリ

羽ハ鶴ノ

なま

生羽本白三ツ立ニシテ紙作本式ナリ

但シ白糸作ニシテ

モ不苦ナリ

墓目キワニ廣サ五分ニシテヨリ糸ヲ以

テ沓卷ヲスル箆ハ箆卷キワヨリ長サ五分ク

リノ深サ三分刀目ノ付様ハ走羽ヲ上ニシテ外ノ

方ノ刀目三ツ内ノ方四ツ以上七刀ツクヘシ箆

ノ所ニ皮目ヲ殘ス故ニ沼太箆ト云

沼太箆ト云ハヌタメ鏝

ノヌタヨリ移タル詞ナリ

引目ニハ桐ヲ用ユ

是ハ木ノ生ヨロシキ故ナリ

尤木ノ本ノ方ヨクツミテカタキ所ヲ可トスヘシ

又山椒ノ木ヲ用ル事

モ有

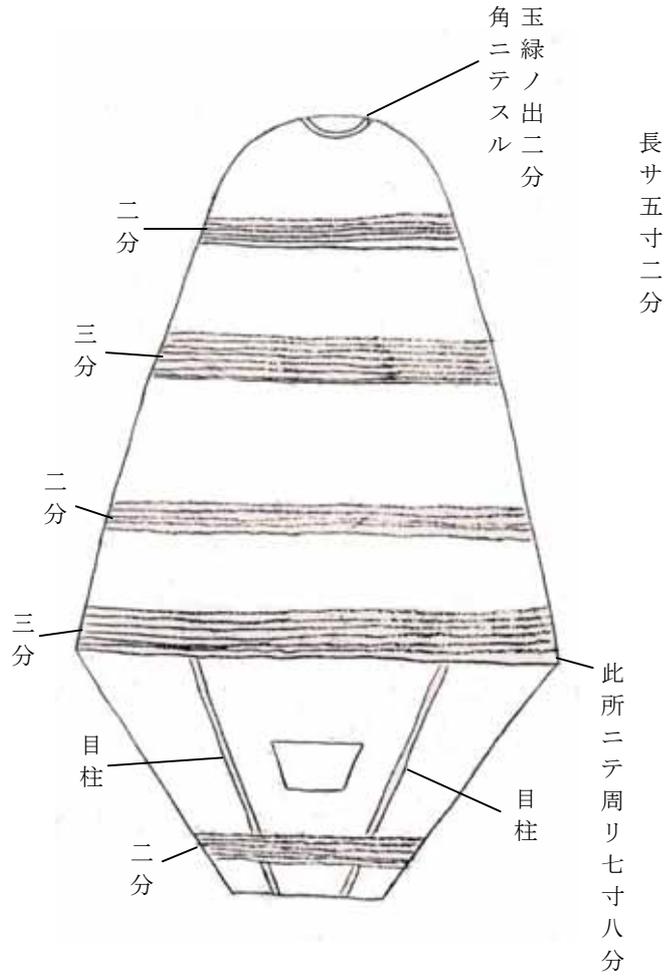
是ハ山椒産生其音同シキ故祝言ニナツミテ作ル事ニテ當流格別ニ用ユル所ニハア

ス^ラ 寸法ハ左ノ如シ目ハ三ツ割合テ明^ル目柱ハ目
ノ兩方ニ生ノヨ~~中~~キ竹ニテ入ル目柱ノ数以
上六ツ也射付ノ所ニハ錦ニテ張ヘシ又其射付
ル所ノ真中墓目ノ内ニ竹針ヲ一寸ハカリ出シ
置テ篋ヲ上ヨリ指入ル様ニ篋口ヲ此竹針ニシ
ツカリトサシ込ナリ先ツ畧制ノ墓目寸法左ノ
如シ

引目寸法

ひきめ
蟻目削様

先ツ引目クラント思ウ時ハ桐ノ木ノ能木理ヲ
ミタル所ヲ取長サ大概ニ定メ木ヲ四角ニ削ナ



シ又其ヲ八角ニ削リ其上ニテ圓ミヲ取テ削リ

ナスサテ大概ニ形ヲ定テタテニ真中ヨリ引割

内ヲクリテトル其時上ノ篋入ノ所ヲ少シ殘シ

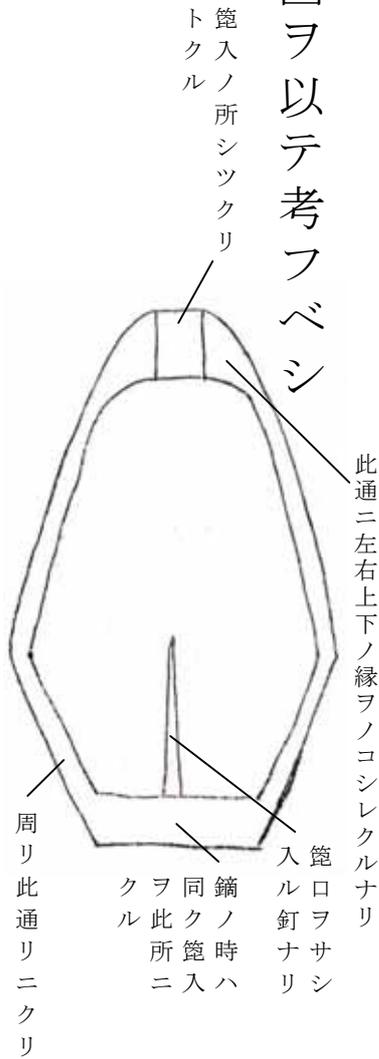
テ又下ノ射付ノ所モ少シ殘スナリサテ能サラ

エテ添ニテ一返ノゴフソレヨリ合セテ付ルナ

リ尤合セ目其外モ細カニ削磨キテ胴卷ノ分程

切シツメテ其上ニ麻ノヨリ糸ニテ胴卷ヲスル

クリヤウ圖ヲ以テ考フベシ



篋入ノ所シツクリトクル

此通ニ左右上下ノ縁ヲノコシレクルナリ

篋口ヲサシ入ル釘ナリ

鑄ノ時ハ同ク篋入ヲ此所ニクル

周リ此通りニクリ

誕生墓目

政在曰矢本
秘傳ノ圖爰
ニ追加ス

政在云是ノ矢ノ

註解ニ云是ハ誕

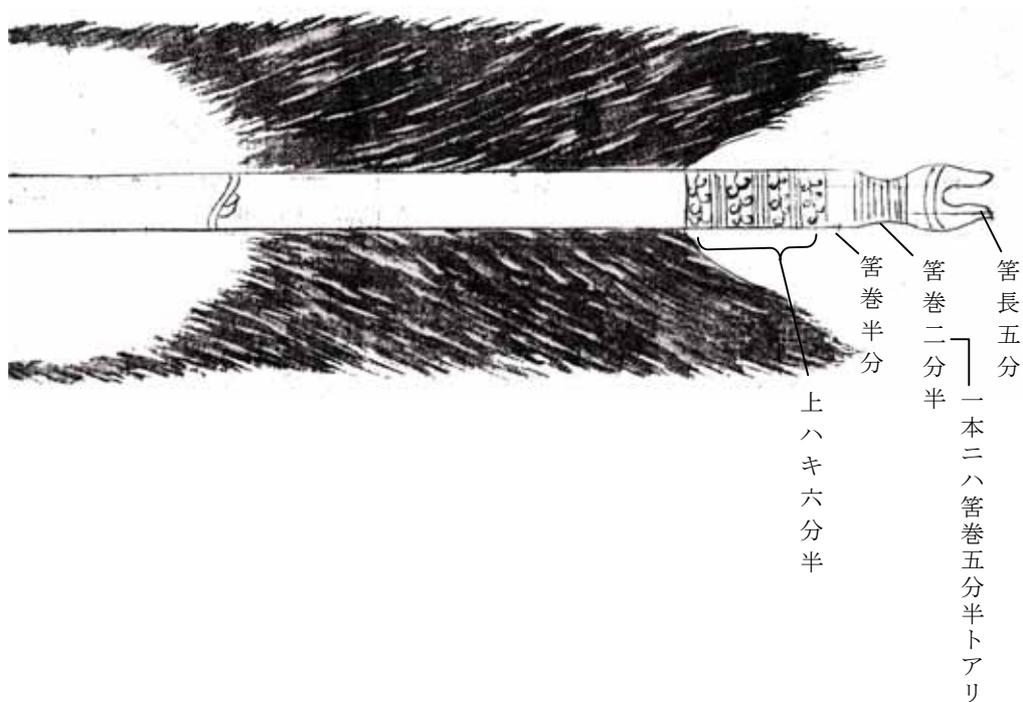
生墓目也篔八五

節羽中ノ節ヲ賞

白篔也但三節篔

ヲモ可用筥ハ節

筥也小笠懸ノカ



ラノ筈ノコトシ筈卷

紅糸也羽ハ鶴ノ本白

ヲ用但羽ヲサス羽長

四寸二分計三立也上

ハギ本ハギニハ錦ニ

テ包其上ヲ細藤ニテ

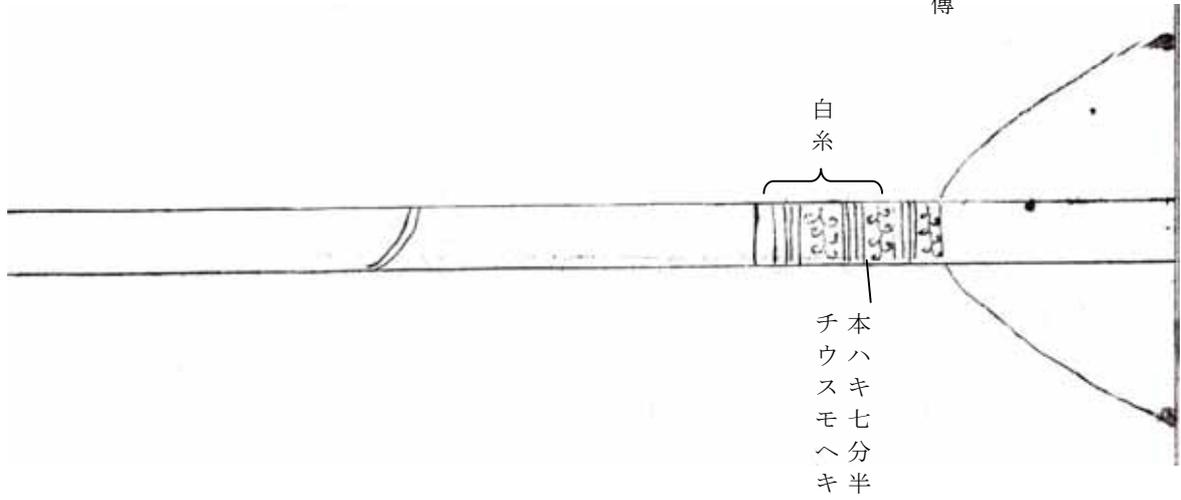
七五三五七九ト可卷

也藁目ノスケキハニ

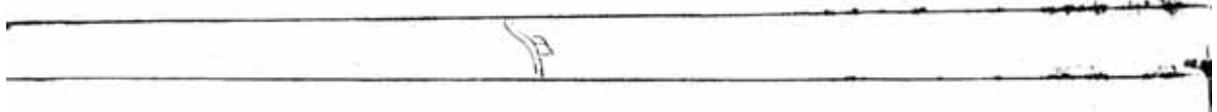
ハ根多卷ヲ鏑矢ノ

如シテクツ卷ヲハ青

又云羽ヲラシテモヨキ也口傳



赤黄白黒ノ糸ニテ可
卷也墓目ノ寸法如繪_繪
圖可作木ハ山柵ノ木
也但白木ニシテ卷目
ハ紅糸ニテ可卷也細
工ノ仕様重々口傳多
亦矯目ヲカハ矯又白
糸ニテモ可矯也又墓
目ヲ白木ニシテ五色
ノ糸ヲ以テモ卷目ヲ

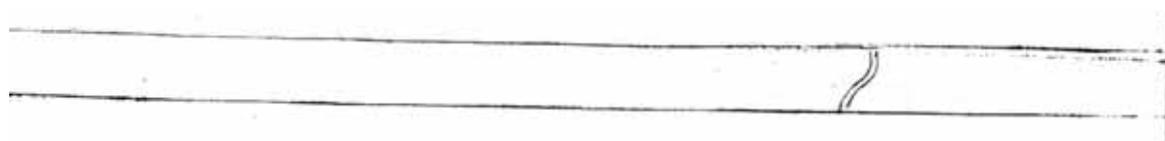


マク也此トキハクツ

卷ヲバカバニテマク

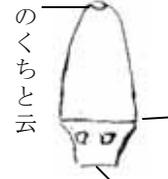
ヘシト見ヘタリ

祐方曰安齋先生ノ貞丈雜記ニ引
目ノ制出タリヨリ^テ此所ニ追加ス
貞丈雜記ニ曰驀目の大小は射手
の弓の強弱による事なれば定る
寸法なし弓強ければ大なるを用ゆ
弓弱ければ少きを用ゆ射て試て大
小を定め用へし豎の長さ^と横のふ
とさの恰好つりあひの事右書に其
沙汰なし依て貞丈其つり合恰好を
考へ左に記す也たとへは驀目豎長
さ五寸ならば横のふとさは六寸ま
はりにてよし^{豎の長に}又豎の長さ
八寸ならば横の^{寸増也}



ふとさは九寸にてよし皆是に准し
 知へし ひとつと云はまかふらの所
 のふとさをいふなり

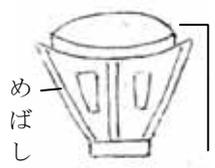
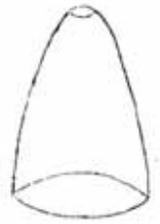
木ハ朴
 ノ木又
 ハ桐也



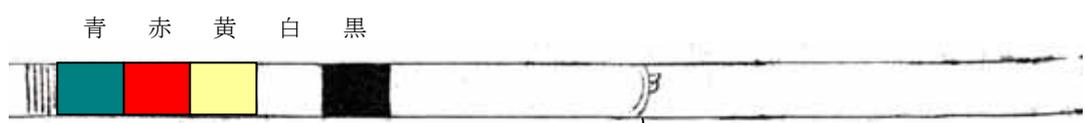
此所をまかふらと云まかふらより引目しりの長さは引目の惣長寸を四に折て其一ツ分のたけにすへし
 ひきめしりと云
 此所少斗内へたはめたるか見能
 まかふらより上のくちまての長さは惣長サを四に折て其三ツ分にすへし

ひきめしりの大きはまかふらのさしわたしの寸を五ツに折て其二ツ分を用へし

又同記ニ曰古代は墓目くりと云職
 人有て墓目わらすしてくりたり今
 は其しかた絶たる故堅に二ツはわり
 て中をくりて後合する也堅にわり
 てくるよりはまかふらの所にてつ
 きたるかよき也



此所香箱などのものも入れのことしまかふらのかたにて合する也せしめうるしにこむきの粉をこね合せて付るなり

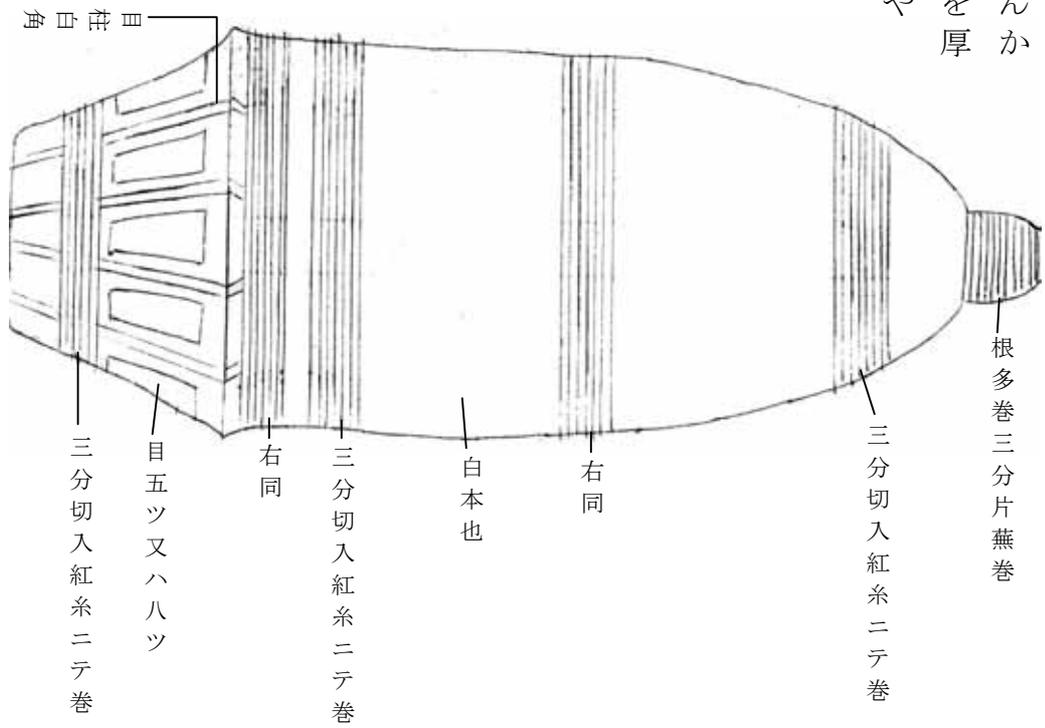


巻 一 寸 五 分
 五 色 ノ 糸 ニ テ

スケ節
 スケキハヨ
 リ三寸六分

めはしらは引目のくしけさらんか
 爲に竹をめはしらに入る也竹を厚
 くしてなり入へしうすくけをや
 うはかりにしては用にたらず

以上貞丈雜記ニ見ヘタル所
 ナリ此マカフラニテ合タル
 引目ヲ桐ニテ作り試タルニ
 マカフラノ所カケ落テ損シ
 易シ利用ナラサルモノナリ
 試シ知ヘシ



竹根引目

遺稿曰古ハ竹ノ根ノ引目ヲ用シト見ヘタリ當

流竹林ニモ四目ヲ竹ノ根ニテ作りテモヨシト

派也

云ヒ傳ヘタリ其制セン様不詳但シ此物ハ輕便

ニテ宣シカルヘシ既ニ東鑑ニ元曆二年五月十

七日ノ条ニ昨日左典厩待後藤新兵衛尉基清僕

從與廷尉侍伊勢三郎能盛下部鬪亂乱是能盛沙汰

餉之間基清馳彼旅館之前其後所令持旅具之疋ひつ

夫等進行之処能盛引馬踏基清之所從仍相互及

諍論此間基清所從取刀切件馬鞞手綱奔行能盛

聞此事馳出竹根引目射所殘之疋夫彼等令叫喚叫喚

馳騷ト見ヘタリサレハ引目或鳴鏑ナト作ラン

一定マレルニモアラス或木或鹿角爲朝ノ鏑資
高カ鏑是也

又竹根ナトニテ作りタルモノナリ祐方日本
文ニハ竹根引

引ノ制不詳トアリ貞丈雜記ニ竹の根墓目はふ
とき竹の根のさきの丸くいもかしらの如くな
る所を取て作る也根ニツにて墓目一ツ作る也トア
リテ其圖出タレハ左ニ其圖ヲ模写ス見ルヘシ

竹の根



竹の根



合せやふ前のことし中をくりぬくへし
外もけつるへし根をよくからして合へし
中をくりぬくはなまの時にくるへしかれ
てのちに又よくくるへし

祐方云前ノコトシトハマカフラニテ合ル引目ノ事ヲ云ナリ

是は外をけつらぬ時の形なり

竹の根引目にはめはしら入に不及

四目追加

遺稿ニ曰志米モヒキメナリ目数四ツ有故ニ四

目ト云

或ハ立標ナト、壻囊抄
ニ書タレ氏是ハアシ、

則高忠カ聞書ニ

モ此物目ハ四ツアルヘキ事本也四ツアルニヨ

リテシメトイフ但シ三ツニモスル也不苦サレ

ト畧儀ナリト記セリ猶今ハ畧シテ三目多シ此

矢矧セン事モ定リタルナシト云ヘト四目ハ

ひら

柁ニテ長サ三伏周リ見計ニ削ル勿論目ハ四ツ

ヲ本トス三所切シツメテエリ糸ニテ卷マキメ

ノ見エヌ様ニ地ヲシテラウ色ニ塗也

又竹ノ根
ニテモス

ル三伏ヲ本トハスレト大小定マリナシ又
何レノ木ニテモ生宜キニテハスルナリ 箆ハ

白箆タルヘシ節ハ三節^ツ箆中羽中射付ナリ^{此八字ニ行ニ註スル}箆ハ

節箆ニス羽ハ真羽ヲ可トス添作キニシテ糸ノ

上ヲ赤添ニ塗ル又色赤ニテモ矧也又四目ヲ赤

漆ニモ塗り箆ハ焦籜ニモスル^ツアリ乍去是ハ

畧義也又一手四目ト云モノ有格別替リタル事

ハナケレ^ツ目ノ数一節ニ二目^ツニクリテ二節ニ

テ合セ四目^ツニスル^{塗色常ノ四目}箆ハサソシノ

ニシテ節陰ヲ取^{節陰ノ下ニ}テ塗ヘシ箆ハ節

箆羽ハ真羽ヲ可トス^{羽長羽山等四目トノ釣合}アルヘシ三ツ立ナレハ羽

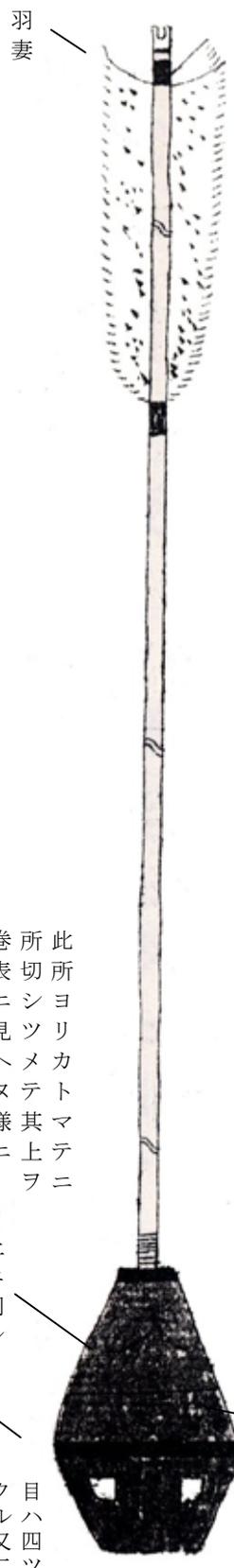
又高忠聞書ハ一手
シメノ^ツ四目ハウ
シノ角成ヘシ柄ハ
白箆節ハコカス羽
ハ真鳥羽ノイロ糸
ハキ也トアリ

ヤマ一通リヨリ高クスヘ
 シ惣テ四目ハ三ツ立ナリ
 栗色ニ是モ畧義也ハ拭篋ニモスル
 一腰トハ但シ此物ノ形一様ナラズ異形有ト
 四ツノ一也
 又濃

イヘ氏當流ニテハ素直ナル形ヲ善トス其圖一

品ヲ左ニアラハス又四目射ンズル事ハ草鹿圖

物ナトニ專ラ用ユ猶下ニ出ス見ルヘシ

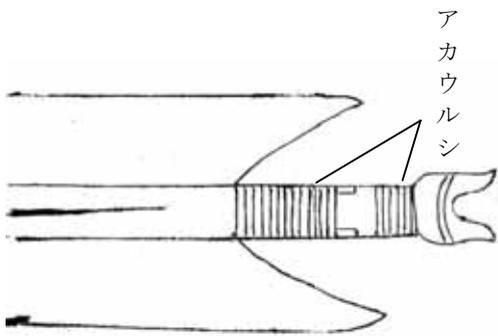


此所ヨリカトマテニ
 所切シツメテ其上ヲ
 卷表ニ見ヘヌ様ニ
 カタチヲシテ塗カ
 クス下ノニ所モ是
 ニ同シ

上ニ同シ
 上ニ同シ
 目ハ四ツ
 クル又ニ
 ニモスル

沓卷
 惣黒塗ナリ
 クリイロニ
 モスル

右圖ヲ以テ知ヘシ惣テ引目類何レニテモ其削
成也一産屋ノ墓目ニ替ラス引目ノ条ト合セ見
ヘシ勿論竹釘ニテ篋口ヲ指入ル一ハ丈夫ニシ
テ可ナリ



政在云此所ニ追加スル

ハ矢本秘傳ノ四目ノ圖

式ナリ側ノ註解云是ハ

カタワラ

一手四目也一手四目ノ

カラハ矢頭ニ少モ無替

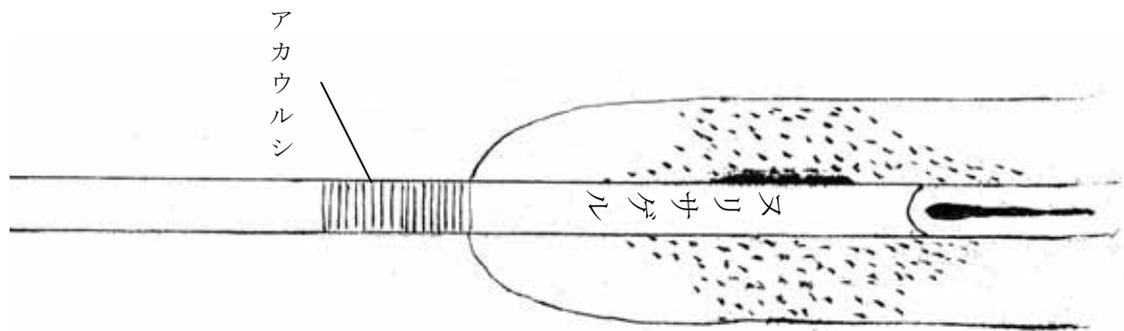
「箆ハ節影ヲ取テ可塗

「本義也但矢頭ノカラ

ヨリ羽長少短ク羽ヲ少

廣クヲスヘシ是ナラテ

ハカハルマシキ也四目



ナリ恰合如繪圖目ハ二ッ
モ三ッモ四ッモアクル也但
四ヲ本トス元來目ヲ四
ツアクルニヨリ四目ト
云也四目可作木ハヒイ
ラキヲ可用中ヲナルホ
トムラノナキヤウニク
リテ目ヲアケ目ノ上籠
口頭三所切シツメ合糸^セ
一本ニ卷目トアリ
ニテ目ノ見エヌヤウニ

卷メノ一也



地ヲシテヌリラウ色ヲ
可取目ノアケ様ニ口傳
アリ右目ノアケヤウア
シケレハ鳴ル一ヒキシ
又中ヲヨククリタルホ
ト鳴モサヘテヒ、キモ
タカシ四目ヲサラニ作
ル時ハ赤漆ニヌリ卷目
ヲハ黒ク可塗篋ハ拭篋
タルヘシ是ハ略義ナリ

ト見エタリ

白藤ノ細ニ
テ爪六計卷



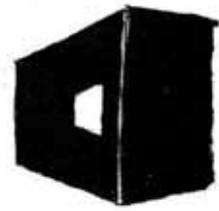
三分計
片カブラ卷

アカウルシ

矢頭 じんどう



四目如斯ニモ



遺稿曰此物モ古代ヨリ有ナリサレトシントウ

ト呼一ハ何レノ頃ヨリト云一ハ不詳延喜式ニ

記セル大伊多都

イタツキノ一
的矢ノ条出ス

則是ナリ又此物

ハ神代ヨリ有物ナレハ神頭ト書カ可シト云ド

信シカタシ又磁頭ナト書ケレト右大平題ノ一

ナレハ矢頭ト書カ抛アルヘシ

和名抄ニハ平題
和名以太都岐ト

アリ平題ノ題ハヒタヒトヨムヒタヒハヒタヒ
ハ頭ノ平ナル故ナリトアレハ矢頭ト書カヨキ

ナ
此物作ン様モ一同ナラズ猶今世ニハ異制繁
リ

多ナリ此物本式ニハ米まかふら加布良トテ海ニ生フル

藻ノ根ヲ能々ホシカタメテ長サ三ツ伏ニテ少

シ切込テ三所ヨリ糸ニテ巻表ニ見エヌヤウニ

黒漆ニ塗ルナリ篋ハサワシ簞ニシテ節陰ヲ取

テ節ハ三節ツ スケ節羽 中篋中 ヲ本トス乍去畧ニハ四節

五節ニモスル但シ幾節篋ニテモスケ節ヲ本ト

ス スケ節ノ有所矢頭ノスケ 箬ハ節ハスナリ羽

ハ真羽三ツ立タルヘシ矧ハ黒ク塗ヘシ又濃栗

色ニモスル是ヲ一手矢頭ト云 羽ハ勿論陰 圓物

陽タルヘシ

草鹿或ハ畧儀ニハ笠掛等ニモ用ル事アリ

右ノ類別

記ニ悉クアリ又古キ禮家ノ一傳ニハ平題

今云シニハ

鹿角ニテ長サ己カ手ニテ三ツ伏也黒ク塗卷目

ニ所アルヘシ

ミカキニシテ不塗モ可ナリ

篋ハ白篋ニテ節陰

ヲヌルヘシ箬ハ節箬羽ハ鷹ナリ是則一手平題

也矢筒ニ一手入テ自然ノ時圓物草鹿挾物ナト

可射然ハ人ニ一手平題ヲ所望スル「常ニハ不

可有射手方ニヲヒテ秘事ナリ神動じんどう一手トハ云

任一手平題トハ云ヘカラス能々可心得也ト記

セリ又矢頭ノ畧制ニハ篋ハ拭篋ニシテ節数モ

不定筈ハ節筈ニテ羽何ニテモ三鳥合セ矧ハ赤

漆ナリ神頭ノ木モ定マラス柎ひしやう或ハフクラ柴杯

ヲ用ユ幾節ニテモ持ヘシ是ヲ数神頭ト云フ左ニハ一手

矢頭ノ一品ヲ頭ス余ハ是ニテ考フヘシ

矧ハ上下トモ黒塗但シ濃栗色ニモスル

三ツ立ナリ

筈節筈ナリ

何レノ節モ節陰ヲトル

沓卷五分計

神頭ハ女株ニテ作ル長サ三ツ伏黒塗ナリ

矢頭ニ筈入ノ深サ真中ニテ入ルヲ可トス筈入淺ケレハクシケルモノ也

サワシ

又的矢代ニ用ユル矢頭ハ筈ハ薄火色或ハ渋筈

ナトニ節陰ヲ取ル節ハ羽中凡ニ五ツ幾節トハ定マラス

羽ハ何ニテモ三羽ニテ岡本記ニ矢代神頭ニ鷲ノミノモヲ昔人ノ付テ



出シタルト有是ハカシ早ク見ユル所ハサルト
ナレト自然鳥ナト射ルトアレハ只真鳥羽ヲツ
クヘシ第一ノ覚悟トアリサレハ
今世トテモ心得ノ有ヘキトニヤ 黒漆矧也 又何
色ニ

モ 矢頭イカニモヤワラカナル木ニテ作ニ所ヨ

リ糸ニテ切込テ卷栗色ニ塗ヘシ昔京都ニテ的

行レシ時貴賤ノ見物ノ中ヨリ射手ヲサシテ印

籠巾着扇子ノ類ヲ出シ一筋所望ニヲヨフ其時

彼矢頭ヲ以不中様ニ目當ノ下面ヲ射ルトトソ

其頃ハ此類はなはだ甚流行トス云傳タリ故ニ辻的鬮的

等ノ節ハ今ニ此心得ニテ此制ノ矢頭ヲ矢代ニ

スルトナリ的矢ノ卷ト合セ見ルヘシ其圖左ニ

出ス



矢印ノ短冊等ヲ付ルニハ上作ヨリ上ニ可付又本作ノ下ニモ付ル定リナシ
 今世ニハ印ニ異様アリケレ^レ當流ニハ取ヘカラス性名ノ札ヲ付ルヲ可トス

右ノ外異形多シトイヘ^レ當流ニテハヤスラカ

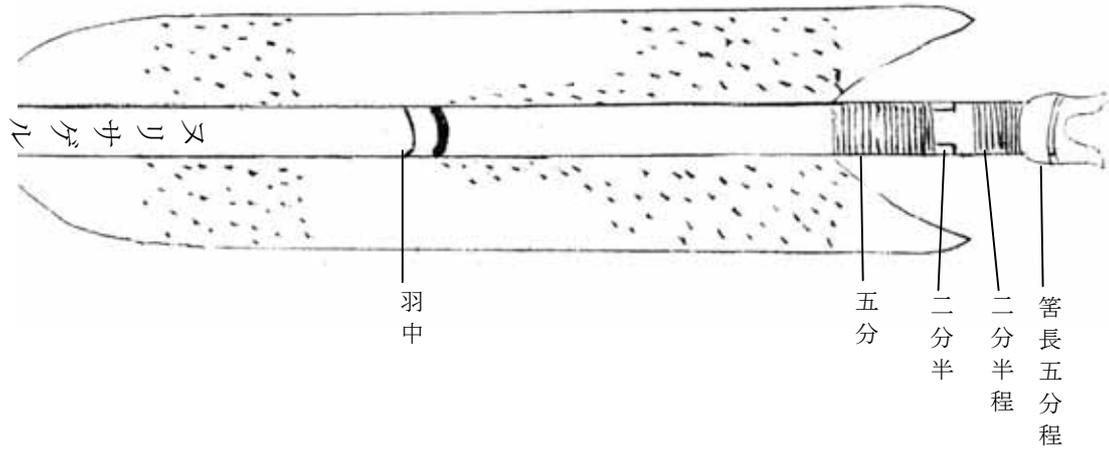
ナル形ヲ可トス少シク替レル形三品ヲ左ニ顯

ス元來此物ハ敵ヲ射倒^{タラ}ス用ナレハ考ヘ有ヘシ

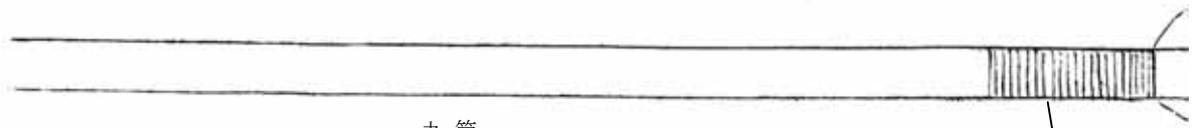
矢代神頭ノ類ニハ不有
 元來此物ノ實用ヲ云也



政在云此所ニ追加スル矢
 頭ノ圖モ矢本秘傳ニ出タ
 リ其註ニ是ハ矢頭也篋ハ
 節影ヲ取可塗箬ハ節箬但
 ヌタ箬也コシ卷ニウルシ
 ヲタムル也又ヌタメヲ赤
 ウルシニモヌル也羽ハ真
 鳥羽タルヘシきじ雉山鳥ノ尾
 ヲモ可用矯目ハアカウル
 シカハキ色也篋ハ羽中ス



ケ節ヲ可賞スケ節ノホトラ
 イ矢頭ノスケキハヨリ二寸
 五分計也矢頭ノスケキハヲ
 三分計ヨリ糸ニテ巻テカハ
 キ色ニヌルヘシ篋ノフシハ
 イクフシトハ不定但三節篋
 ヲ可賞但四節五節篋ヲモ可
 用矢頭可作木ハヒイラキ又
 ハフクラシハヲ可用和布^{コラ}苳
 ヲイカニモ干シカタメテモ



七分又七分半
 二モ八分ニモ
 口傳

篋太方
 九分半斗
 一寸ニモ

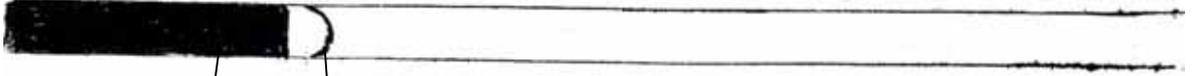
作ル也矢頭ノナリカツカウ
如繪圖作^リ三所切シツメ糸ニ
テ卷地ヲシテカタクラウ色
ヲトリタルヘシサウニ作ル
時ハ矢頭ヲ赤ウルシニヌリ
卷目ヲハ黒クスル也矢頭ヲ
如斯サウニ作ル時ハ篋モヌ
グヒ篋ニモスル也矢頭ノカ
ラノ筈ヲ的矢ノゴトクモス
ル也赤羽ヲ雉ノ羽ニテモハ

ミ 中 ニ ヌ

篋
中

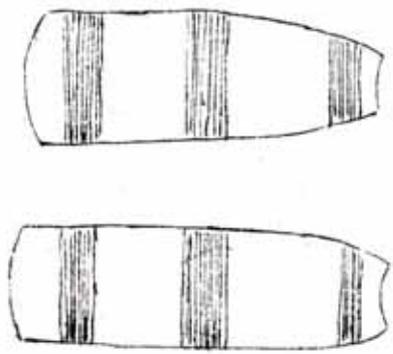
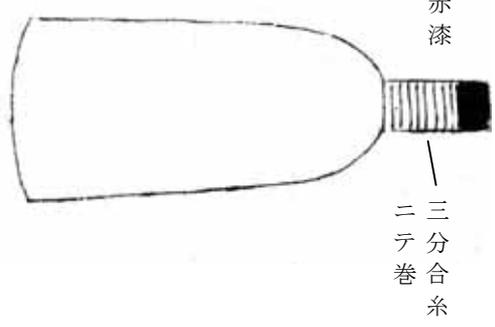
ク也真鳥羽ヲ本式ニ用トイ
ヘト雉ノ羽同尾山鳥ノ尾ナ
ト用ト根本也口傳トアリ

一本ヲ見ニ節陰也黒塗ニ非ス



スケ節

スリスケ
二寸手キ
五分束ハ
カ但ヨ



矢頭如斯二毛

○ 矧くるり

遺稿ニ日久留利是ハ水鳥ヲ射ルニ便有様ニ制

シタル物也篋ハ火入篋又拭篋ニシテ水中ニ入ル矢ナレ

ハ白篋ナトノ類ハ不用箬ハ篋箬續箬好ニ仍ルヘシ羽ハ水

走ノヨキ羽三ツ立也久留理ハ桐朴ナトニテ作

リ一二所切シツメテ卷黒塗ニスル鏃ハ少ちいさキ(雁)厂

股ヲスゲル尤此厂俣ハ篋口ニサシ入ルニヲヨ

ハス矧ニ指込置ナリ篋入ハ矢頭ノ如ク矧ノ中

ニ指込ミテ留ル也是水禽ヲ射ルノ用マテニテ

事足レハ也此矢ヲクルリトハ浪上ヲクヅリ走

行スル故ニカクハ云ナリ久留利トハ轉セルナ
 リ其圖左ニ顯ス

三立何羽ニテモ水走ノヨキヲ用

上下管卷黒スリ

朴桐ニテ作
 黒ク塗

矧塗厂
 ニニ股

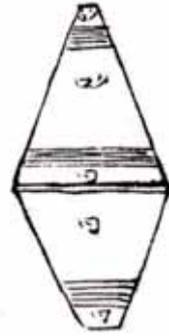
此所ヲ切リツメ
 糸ニテ卷塗

祐方云此所ニ出サレタル矧ノ形ハヒヤウタ
 シナリニ中ヲ細クシテ先ヒロカリタレハ水
 上ノ走リアシ、予モ毎度政在先生ト千代筋
 加路川ナトニテ試シタルニ其形ニヨリテ利
 害アリ政在先生自ラ作レラル其形左ニ圖ス
 此形ハ見分ハ甚アシ、ト雖水面ニ射流テハ
 至極利也又予カ作りタル形モ左ニ出ス此形
 ハ甚以テ不利也矧ニ似セテ作タレハマカフ



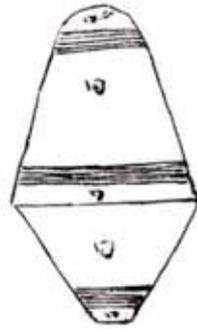
ラヨリ先キ短クシテ水切レワロク水中ニ喰
 込ミ其所ニ矢止テ水上ヲ走ラス此矢ノ趣意ハ
 水面ヲ走ラセルヲ以テ用トシタレハ其形ノ
 見分ニカ、ラス水上ノ走ヲ是トシタレハ本文
 ニ出タル圖式モ
 利用ナラスト可知

先生ノ作ノ箭ノ圖



此斯マカフテ
 ヨリ先長クテ
 見分アシキト
 モスナリタル
 カ水上ノ走リ
 便利ナリ試知
 ヘシ

祐方作ノ圖



如斯マカフテ
 ヨリ先短クテ
 フ切ラスナリ
 甚名利ナリ試
 知ヘシ

柴矢

遺稿曰芝矢是ハ弓長四十杖ニシテ目當ニ切サ

キ紙幣ノ杯立テ射ル是矢數ノ下射ナリ
如ク ハ堂射

ナノ 是ヲ芝矢ト云ハ彼ノ堂ニ登ラス射ルユヘ
ナリ

ニ芝矢ト云也素ヨリ近世ノ物ナレハ子細ナシ

其制篔ハ皮付或ハ薄火色ナトニテ節ハ定メナ
シ筈ハ篔筈羽ハ鴨ノヒラキ羽ヲ可トス羽長ケ
四寸計羽山ヒキ、ヲ可トス筈卷スルニ及ハス
上矧ト筈卷トカヌルナリ又何鳥ノ羽ニテモ矧
ク塗モ定マラス根ハ板付也サシ、レタル物ナ
レハ圖ヲ畧シヌ

箭籥やがら

遺稿曰矢篔ハ倭名抄ニ籥ノ字ヲ夜加良トヨメやから
リ篔ノ字ハ篠竹ナトニ用ユサレト俗ニシタカ
フヲ可トス既ニ日本紀ニ天智天皇十四年十一

月癸卯朔甲辰儲用鐵一万斤送周防摠令所筑紫

大宰請儲用物絶キヌ一百斤布三百端庸布四百常鐵

一万斤箭竹二千連送下於筑卜見へタリ延喜式

民部省式云凡兵庫寮造箭柳篋四百廿隼人司油

緝料二百隻並仰大和國每年交易令送採乾筒取

強備價並運賃並用正稅イリケシタモ其熬笥灑籠等料竹令山城

河内撰津等造送卜見へタリ其外古キ物語卜モ

ニ見エシ所塗篋白篋節陰篋塗篋篋等ナリ中頃

ヨリハ拭篋焦篋渋篋ナト見タリ其餘猶近キ世

ニ至テハ美飾莊觀ヲ專ラトシテ異様ノ物多シ

ト知ヘシ其品々大概ヲ左ニ述ル右延喜式ニ記

セル柳ノ篋ハ桑ノ弓蓬萊ノ矢

柳篋桑弓蓬萊矢ノ類ノ下ニ出

杯云ル物ト同キ事ニテ武士ノ實用ニアツカル
ヘキ物トハ思ハレス禮式ノ威儀ニ備フル物ト

見ユ但シ其頃ハ用シニヤヲホツカナシ惣シテ

是ノミニモ限ラズ弓矢ノ具足此外ニモ彼ノ差

別アルヘシタゞ武士ノ宗トスル所ハ花飾ニヲ

カサレズ貫革實用ノ大事ヲ失フヘカラス軍談

等ニ三年竹ノ節近ニ金色ナルヲナト、有深ク

察ヘキト也

籐品

白篋是ハ火ナトモ不入生素ノマヽニテ皮ヲサ
リ磨キ上タル物ナリ

塗篋是ハ漆ヲ以テヌリタルナリ雨露ノ利用也
節陰是ハ節々ノ枝溝ヲ生漆ニテ塗り其余モ竹
ノ産皮ノ卷タルカ如ク塗廣タルナリ

塗篋是ハ塗篋同物ナリ又節々ノ間ヲ平芋からむしニテ
卷漆ニテ塗ユムル是ハ卷目ヲ表ニ顯サヽルタ
メ且雨露ヲシノクヘキ様也

拭篋是ハ生漆ニテ幾返トナクノコヒタル篋也

焦篋是ハ火ヲ強ク入テコカス故カクハ云ナリ
少ク入タルヲ薄火色ナト云フ

渋篋是ハ泥中ニ沉^沈テ黒キ色ヲ取ル厚薄アリ又
上皮ヲ削落シテアヒニテ染メウルミ朱ニテ節
陰ヲトルト云リ乍去是ハ異制ナルヘシ

長節是ハ節ヲ長ク塗カクス故ニカクハ云也利
用節陰ノコトク塗篋ノ畧制ナリ長短好ニヨル
ヘシ

管篋是ハ節々ヲ一寸程ツ、スクサマニ塗切タ
ルヲ云フ羽中杯ニ金箔ニテ管卷シタルモ此類

ナリ

皮付是ハ竹ノ皮ヲトラズ其儘ナルヲ云ナリ

村皮是ハマタラニ削テ皮目所々ニ殘シタルヲ

云ナリ

村濃是ハ漆ニテモ又金銀ノ箔ニテモ砂子ノ如

クムラクト塗タルヲカクハ云ナリ

五色篋是青赤黄白黒ノ漆ニテ塗マシユルヲ云

ナリ

○箭筈

遺稿云筈ニモ品々有テ其矢ニ從テカハレリ乍

去續箬篋箬ノ二ツニ不出續箬ハ竹節ニテ削ル

故二節箬托云 的矢角木矢杯ニ用ユ圖 又此節箬 左ニ出ス箬箬托云フ

二刀目ヲ立テ皮ヲ殘ス是ヲ沼汰箬ト云フ 引目矢ノ

類上刺類神頭矢ノ類ニ用ユ圖左ノ 如シ沼多ノ「鳴鏑矢ノ条ニ出ス 也又篋箬ハ

トモ箬或ハ直箬托云是ハ續箬ニ對スル詞ナリ

右續箬ヲ不用余ノ矢ハ皆此稟箬ヲ專ラ用ユ 篋箬

ニハ今世弦請ノヨロシキ 是ニ箬つ箬ト云アリ 爲ニ小箬ト云物ヲ入ル 是ニ箬つ箬ト云アリ 律

朱 征矢ニ用ユ 竹ノ箬ヲ即チ直ニ箬ニ作ル 圖左ニ出

ハツ、ノ「ナレハ小箬杯云物モ不入ヲ本トス

ヘシ惣テ近キ世ニ至テハ弓懸ノ制モ 鞞ノ「下 出ス

古代ニ替リテカタメ或ハ角入杯出来タレハ此

鞞ニ便リ善ラン様ニ筈ノ制モ工ミニナレル物たく

ナルヘシ但シ其矢ノ品ニ因テ其定レル筈ヲ用

ユヘキ也私ニ混スヘカラス一説ニ上古繾筈

ト云フこのみたま無シ京都將軍足利義満公也ノ御時弓箭ノ細

工美制ヲ好玉このみたまフ故細工人妙手数多有テ繾筈角

筈ノ類ヲ仕出スト言傳ヘリ角筈ト云ルモノハ鹿角ニテ作ル専今

世的矢ニ用ユシカハアレト参考保元物語ニ爲朝ノ矢

ハ三年竹ノ極テ節近ニ金色ナルヲ洗ヒ磨カハ

性弱リナシトテ節ハカリコソゲ木賊ヲ以テ磨

キ猶モ輕テ折モヤセントテ鐵ヲノベテ篋中過

ル込節ヲ通シテ入タリ中 畧羽ハ鷲鳥わしふくろうにわとり雞ノ羽ヲ嫌

ハス藤ハキニ卷タリ筈コラエズシテ破碎ケル

間角ヲ續テ朱指タリト云サレハ續筈ト云物

モ新シカラズ又参考太平記関東大勢上洛ノ条

ニ長崎悪四郎左衛門尉ハ畧三十六差タル白磨

銀筈大中黒ノ矢二本滋藤ノ弓トアリ是等ハ格

別美飾ノ物ナリ彼是考へ合スヘシ左ニ筈ノ圖

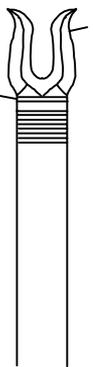
四品ヲ出ス

如是マルクケスルナリ



續筈
節筈
笠筈
削筈
トモ

小刀目七ツ



皮ヲ削ノコスはヲヌタト云フ

此筈上ト同シ筈
ナレトモ小刀目
ヲ立皮目ヲ殘ス
故ニ沼太筈ト云



是モ籥管ナレトモ
小管トテ小竹杯内
ニ入テ二重管ニス
ル是ハ弦清宜キ故
也射手管杯云ニヤ

○箭羽

遺稿云矢ノ羽ニハ昔ヨリ鷗羽ヲ以テ最上トス

是ニ大鳥小鳥ノ差別アリ唐韻ニ鷗みぎハ大鷗也ト

アル則大鳥ニテ山海經ニ鷗ハ小鷗也トアルハ

則小鳥也大鳥ト云ハ尾ノ類十四枚アリテ小鳥

ト云モノハ尾数十二枚アル也羽ノ数ノ一一把

一鳥トハ尾羽トニ一鳥ナ鷗羽ヲ古ヘヨリ真鳥

羽真羽ト云一モ此羽ヲ称美シタル詞ニテ

此外ニ真ノ羽ナキト云「ナルヘシト云ヘリ又
此鳥ノ種類ニイヌワシト云物アリ但シ其生ノ

文品ニヨリテ格別賞翫しょうがんス先ツ昔ヨリ聞ヘシ所

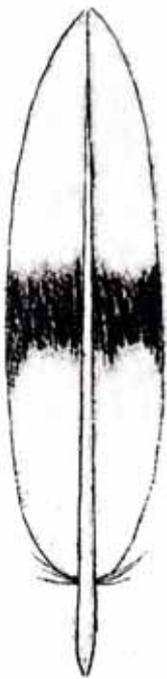
ハ大中黒小中黒切符本白中白妻白本黒妻黒ほくろ

糟尾かすナリ是等ヲ始トシテ異成物モ多ケレト此

外ニ不出ト知ヘシ左ニ其大概ヲ顯ハス

大中黒

小中黒





麤



本黒



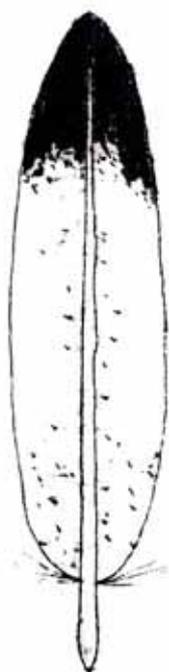
中白



切符



糟尾



妻黒



妻白



本白

右十只品ハ異成物ニハアラス
軍記等ニ古ヨリ見ヘシ所ナリ 此

餘猶今ニ聞エシ物ヲ左ニ圖シ又尤野史ニモ見

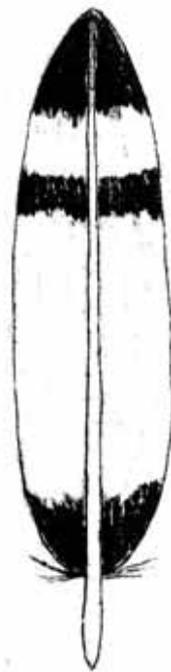
ヘシ所モ有又一向ニ見エサル物モ多シ異様ノ

羽ハマレナルト知ヘシ

星切符



並切符



逆切符



大爪黒



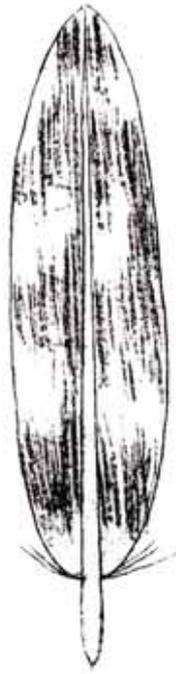
一文字切符



アマノヲモテ



柳地切符



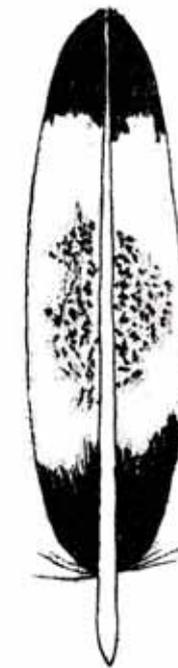
猫切文



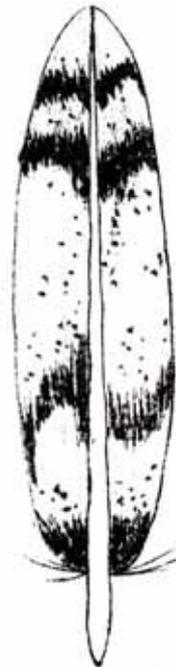
筆莖



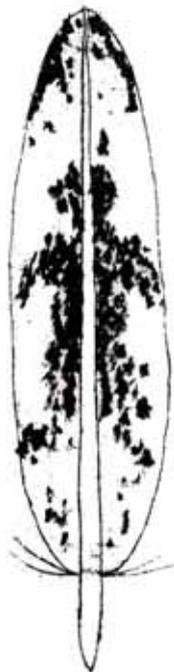
櫻地切文



筋切符



人形符



大本白



基石文



白尾



龍文



高麿



ヒタカ



人形符



木理切文



右二十只品ハ異様ノ物ナリ此餘無量ナルヘシヲ

トロクヘカラス但シ大爪黒大本白高鬣白尾ノ四

品ハヤスラカ或物也又右ノ外ニ角鷹ノ羽ヲ可

トス此鷹美文ヲ肅慎ノ羽トモ稱セリ是靺鞨國

ノ地名ナレハ肅慎ヨリ古ヘ渡タル羽ヲ最
上トス其名残りヲ鷹ノ良羽ノ異名トハナレリ是二三生ト云ルモノ格

別ニ賞翫ス三符ナラサルヲセリフナト云リ又

此類ニ蜂鷲ぼちばみト云モノアリ一説ニ蜂鷲トハ好テ

蜂ヲ喰フ角鷹ナリト云リ則義經記忠信吉野山

合戦ノ条ニ佐藤家ニ傳ヘテサス事ナレハ、チ

バミノ羽ヲ以テハイタルヒトツ中指ノ何レノ

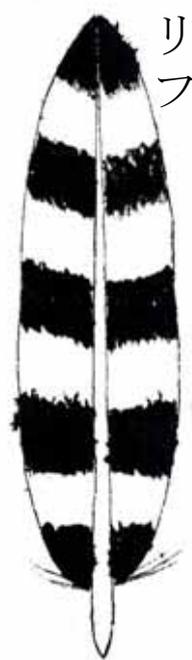
矢ヨリモ一寸筈ヲ出シテサシタリトアリ然ハ
アレト此鳥ノ符八文字ノ形ヲキリタレハカク
云凡イヘリ是又スナヲナル説也鷹ノ羽蜂鷲ノ
羽ノ圖左ニアラハス蜂鷲ナトノ羽ハ猶異文ア

リ

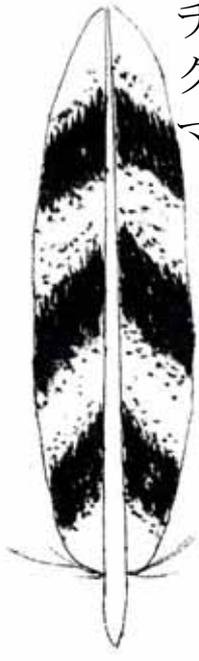
三文



セリフ



ハチクマ



又一説ニ鷹ノ三文ト鷲ノ中黒ヲ賞翫シテ是ヲ御所生ト称スル也此所謂ハ足利將軍家治世ノ時ハ御旗ニ引兩ヲ附給フニ仍テ鷹ノ三生ヲ憚はばかりテ平人はヲ用捨セシト也又新田家ハ中黒ノ御旗也當時新田源氏ノ御事故ニ大中黒ノ羽ノ征箭トスル一ヲ恐レテ諸士ハ是ヲ用捨ス此故ニ御所生ト称スルト謂傳ル也トソ乍去此羽最上タル物ユヘニ容易ニ得カタケレハ彼ノ羽ヲ称シテ御所生ト云ンニハ悪カラス

又此外ニ鶴

本白ヲ上トシテ其餘ハ下也 鶺鴒くぐい又てん天鵝が白とき又ハ桃ツ花キ

鳥或ハ紅鶴ト云ト山鳥尾雉鳥鷺但シ山鳥鷺

ウカラスノナリ五ツヲ矢入ニ用ユト云ヘリ墓目別等ヲ初トシ

テイロクノ羽類アルナリ箭ニヨリテハ何鳥ノ

羽ニテモ可ナルヘケレハ爰ニ顯ス所ハ其大概

ト知ルヘシ

又右ニ云ル鷗ノ羽ノ中ニウスヘヲト云モノア

リ世ニハ鷹ノ字ヲ用ユレト源平盛衰記ナトニ

ハ護田鳥尾ト書テウスヘヲト讀タリ是ハ尔雅

曰鷺澤注曰今姻澤鳥似水号蒼黒色在澤中見

人たちまち輒鳴喚不去有象主守之官因名云俗呼爲護田

鳥トアリ又本朝食鑑云俗号樋口護郎護田鳥也

状似五位鷺而小蒼黒色頭有加白幽冠者脚掌黄

赤亦不懼人常棲田澤之小水間立水中捕小魚食

又謂溝五位トアリ此鳥ヲ関東ニテハミナクチ

セブリト云フ鳥也又ミナク千鳥ト云也古名ハ

ヲスメ鳥ト云ヘリ彼ノ於須賣止里ノ羽ノ文ニ

鷺ノ尾ノ文相似タレハ護田鳥尾ト書テオスメ

ヲヲスメフナト云シナリ今是ヲウスベヲト云

ハ轉シ誤リタル也サレハ其羽本ノ黒キ所半過

ルマテ黒キヲハ高鷹ト云鷹鷹ナド、書ハ大ナ

ル誤ナリ既ニ盛衰記鴨越ノ條ニ畠山庄司ハ護

田鳥尾ノ箭負テ三日月ト云栗毛馬ニ乘乘タリト

アリ其外此書中
所々ニ見ユ

染羽ノ事真鳥ノ白尾ヲ染ルヲ定マレル式トス

サレド鷺鵠ナドヲモ染ル其文ヲ染出シ事モ其

色モ定リナシ政在曰此章分ツテ温古矢
之部ニ贅ス合考スベシ

凡羽ノフノ文字符トシルシ或ハ生セイノ字ヲモ書

クサレト非文ノ字ヲ用ヒテ正字トスヘシ則飾

抄ニ曰府フ隨身鷺尾ル胡籙ヲ帶切鷹ル胡籙ヲ負可也云

云是文ノ字ヲ用ヒタル證ナリ元ト文ノ字ヲ用

ヒテ聲ノママニ呼シヲ後俗符或生ノ字ヲ用ヒ

誤シナルヘシ此類マ、多シ考フヘシ

石打ノ征箭トハ真鳥ノ石打ト云羽所ニテ矧夕

ル故ニカクハ云ナリ政在曰此矢古ヘヨリ大将ノ具足トナルト此章ニ載

セラレタリ今分ツテ温古元來此石打ト云ルモ
矢之部ニ出ス合見スヘシ

ノハ羽強ク羽末ヲカラズシテ自然ニ宜シク矢

行鋭ナルガ故ニ格別利要ナリトス石打ヲ賞翫スルノ異説

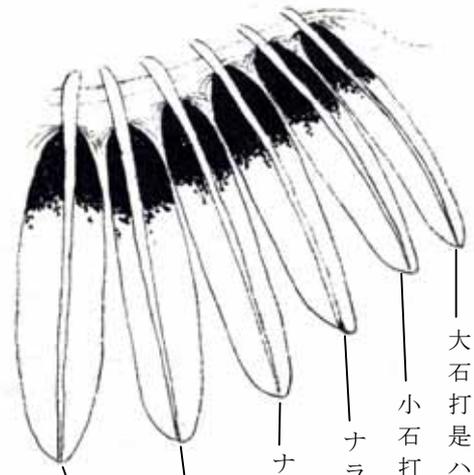
多クアリケレトモ妄且ヘ一尻ニテ左右二枚ナ
作故ニ爰ニシルサス

ラテ取とるト難キユエニ重宝トハスル也但シ大石打小石打

トテ一尾ニ石打四枚アレ氏大石打ヲ是ヲ石打
以テ第一トスレハ一尾ニ二枚ト云也

ト云「ハ惣テ鷲角鷹ノ類ハ深山ノ巖石ナトニ
下居ル「常ナレハ尾中ノ端羽必ス巖石ニフル
ルナレハ石打トハ云ナリ 岩石ニ限ラス下居ル
所ニ此尾スル故ニ余
ノ尾ト違ヲ格 又鳶ノ石打モ可ナル物ナリ左ニ
別強キナリ
尾ノ名所ヲ記ス元來石打ノ羽ナトハ寒士ノ得
カタキ所ナリ又切文中黒ノ類モ尋常ノ人ハ用
ユル物ニアラズト言傳タリ近世ハ莊觀ヲ専ラ
トスレハ誤レル「ノミ多シト知ベシ

○羽名所



大石打是ハ岩石ニフルユヘナリ大ハ小石打對シテ云ナリ

小石打是モ岩石ニフル也大石打ニ對ス

ナラシハ是ハナラブシタレハノ中畧ナリ

ナラヲ是ハナラブヲノ中畧也

タスケケヲ是ハ上尾ニ添タスケルノコ、ロ也

上尾是ハ余ノ羽ノ上ニアレハカクハ云也
又雨覆ナドモ云ニヤ

右ハ一尻ノ半ハ六枚ナリ左右同キ故ニ畧ス都

合十二枚一尻ナリ

何レノ鳥モ皆十
二枚ノ尾数ナリ

乍去大鳥ノ

尾ハ十四枚有モノナリ十四枚ノ尾ハタスケケヲ

二枚有是ニテ十四枚ニナルト知ヘシ凡テ鳥尾

一把ト云ハ拾二尻ナリ一鳥トハ尾羽凡ニ含シ

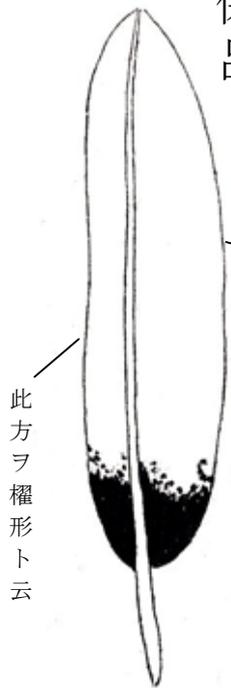
テ一鳥也一尻ト云へハ尾バカリ云也又兩異ノ

羽ノ中ニ權形太刀形ヒラキツホミホロ風切ナ

ト呼ヒワクル所アリ左ノ如シ

保呂

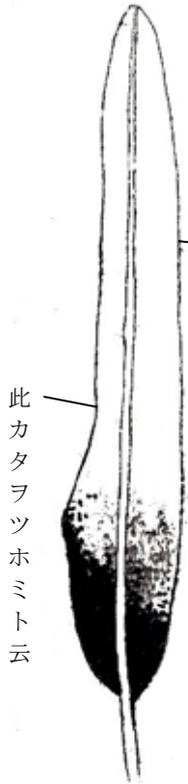
此カタヲ太刀形ト云



此方ヲ權形ト云

風切

此方ヲヒラキト云



此カタヲツホミト云

犬鷲

祐方云犬鷲ニ鷲ノ一種ニテ少シ小シ是ヲ小鳥

ト云ナリ年ヲ經テ古ク成タル鳥ヲ熊鷲ト云也

犬鷲熊鷲ト二名ナレト若鳥古鳥ニテ此差別ア

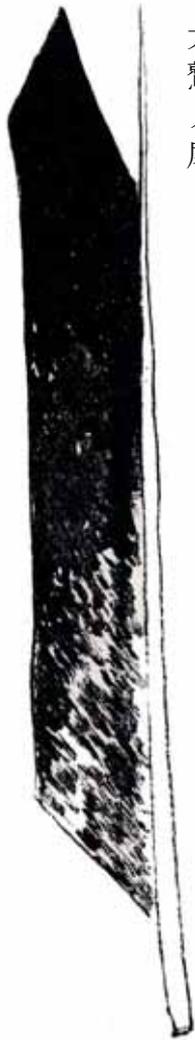
リ符ハ種々アリテ一様ナラス播州矢工ノ持参
セシトテ忠夫先生ノ写サレシ圖ヲ左ニ出ス

犬鷲ノ尾



地ノ色少シ薄茶也スシタル色トハ違ヘリ古鳥ユヘ
ナリトリ

犬鷲ノ尾



熊鷲ノオリメ

此熊鷲ト云モノハ犬鷲ノ至極フルトリナリトリ鳥ノ
鵠躰犬鷲ト同シトナリ尾ノ文モ多分如此トリ



一貫云右ノ羽ハ播磨國ノ矢工小嶋源右衛門云
ル者持参セリ故ニ模写シタルナリ源右衛門云
鷺類ノ尾羽ノ数大鳥ハ尾十四枚小鳥ハ十二枚
也十四枚ノ尾数ノ鳥大鳥ノ外ナシト云リ又羽
ハ肩六枚折目六枚保呂十二枚左右ニテ四十八
枚ト云リ其内保呂ハ小羽ニ至リテ長モ短カク
薄キ故ヘ一通リノ鳥ニテハ左右ニテ十七八枚
取レリト云リ

羽染様 追加

祐方云矢ノ羽ヲ染ム事忠夫先生ノ随筆ナル瀆

茄子ト云書ニ一貫云矢羽に染羽といふものあり
り古代より見へしもの也東鑑建久元年十一月
の記に染羽の野矢あり保元物語ニ山田小三郎
惟行十八さしたる染羽の矢也其外小笠原家の
古書にも見ゆ此ものは大鳥尾數十枚有の白尾残染
る事宿上也或は鵠鷺の類の白羽は矢にはもて
用ゆへし羽長ケある矢には用ひ難き事勿論也是
を染る事は白羽を白水米ヲカシク水濃に浸し
置く事三四日もひたしあふらけの取れたらん
と思ふ時干上ケて其をレ或は藍或は紅などにて染

る也能く染上又干し立てそれはり糖を焼く其

煙に入てゆびにて撫て並おそろゆる也是をあ

ふらもとしといふ丈より干て用ゆ也

是ハ播州
矢ユ小嶋

源右衛門カ傳也或ハ我師家ノ傳トハ少シ異ナ
リ古代ヨリアリケレトアマリ可好モノニハ非
ス幼年ノ人等美ヲ
ヨロコヒテ作ス也 又いろくの細文など染入る

にはあふらをぬきたるうへ其白く残すへ幾所

には堅糊にて模様をかき然して染へし格別の

細文は不出来也というしなりト見へタリ爰ニ

師家ノ傳ト云レタルハ大口家ノ傳ナリ此傳政

在先生ニ不傳今ハ猶ヲ絶タリ可惜々々又貞丈

雜記ニ染羽の矢古書にみえたり羽はた、はそ^只
まらぬ物也赤きは紅青きはあゐらう黄はしわ
う黒は硯すみもえきはあゐとしわふを交合^{スル}む
らさきはあゐとへに也これらを^サゑのぐを醋に
てときて煮付て染てほしかはきたらは又染へ
しこくもうすくも好に随ふへし醋を用ひされ
は羽にしみこまぬ也何色に染るとも醋にて^ゑ
のぐをとくへし白羽を染るなりトアリ試タル
事ナケレハ何レカ是ナル事ヲ不知試テ自得發

明スヘシ

矢矯 はぎ 追加

祐方云今當ノ矢代箭ハ觀美ヲ好ミ古代ニハ聞
モ及又種々無量ナル異様ノハキヲ工夫セリ今

世ノシキリ矯

祐方云古ヘシキリハキト云モノ
ハ白羽ニ黒キ羽ヲツキテシキリ

メヲ立テハキタレハ白羽ニ黒文アリテ白羽ヲ

圖ノ如ク

ツキ合セタリ則本間流聞書ニシ

きりはきといふは羽より五寸二分の中程少上
にてしきま也しんとうのひとつおなとにし
らへて持かよしあはら
はぎ也トアリ考ヘシト云モノハ末矧ト本矧

ノ間ニ中矧ヲシ此所ニテ上ト下ト替リラル羽

ヲ喰違レテ矧タルモノナリ是ヲツキ矧氏云又

小切矯トモヒネリハキトモ云ヘトモ是ヲヒネ

リ矧ト云フハ非ナリヒネリハキハ別ナリ左ニ
シキリハキノ圖ヲ出ス

如此中間ヲシテ羽ヲ喰テカヘニ付ナリ

三立ナリ



又ヒネリ矧ト云モノアリ末矧ヨリ本矧迄羽丈
ヲ長クシテ矢筈ヲ三卷ホト廻シテ卷付ニハキ
タルモノナレハ一名廻矧ト云ナリ又是ヲカザ
ミ矯トモ云ナリ猶委シクハ圖ニテ知ヘシ

此ノ通りノベ付卷ナリ



右二品ノ矧ハ矢代矢ハカリニセル矧ニテ實用

ノ矢ニハアラス勿論古ク書ニハ不見當思フニ

辻的京的觀進的ト云モノ盛ニ行レシ以来ノ更

江戸的ノ類

ナランカ人数多ク群集セル中ニテ己カ矢代人

矢代トマキレンタメニ好事ノ者此的ニ武士ノ

魂ヲウハワレ射事ノ本意ヲ忘レ觀美ナル羽ヲ

以テ右等ノ矧ヤウヲセシナラン古昔ニモ不實
ナル者アリ岡本記ニ矢代じんどうに鷺のみの
毛を昔の人の付て出したる事なりこれ惣早く
見える所はさる事なれ共しせん鳥など射る事
あればたゝまとり羽を付へしト見へタリ今當
モ矢代矢ニ羽ト羽ノ間本矧ニ鷺ノミノ毛ヲ卷
込タルモアリ皆名聞虚躰ノ者ノ所爲ト知へシ
又コリ矧ト云モノ古クアリ貞丈雜記ニ野矢の
羽のはきやうの事小笠原兵庫助長秀記ニ云御
狩場の御供也騎馬六騎なるへし出立は水干行

騰にて沓をはきし、やなくゐの尻籠を負て上
矢には四目をさすへし羽はこりはき也弓はお
もひくにの也云々羽はこりはき也とは此矢の
はき様を云也こりはきとは羽の端を茹らずし
て生れのまゝにて置く事也征矢の羽は羽の端
を茹る也又征矢は真羽を本とす野矢は何羽に
ても用て征矢はこしらへ様法式あり
高忠聞書
杯ニ有之
此矢は法式無し是野矢と征矢の差別也トアリ
此説請カタシ野矢モ矢ニヨリテ羽ノ端ヲ茹ズ
テハ用ニ不立コリハキハ野矢ニカラス能矢ニ

テモ其矢ヨリテ羽ノ端ヲ不茹シテ利用也鏑矢
引目四目矢頭ナトノ矢先ノ重キ矢ニハ羽先ヲ
不茹羽幅ヲ廣クコリハキト云モノニセルナリ
則爰ニ引用セラレシ長秀記ニモ四目ノ叟ヲ記
サレタリ又信豊ノ矢本秘傳ノ誕生引目ノ註解
ニ羽ヲヲサストアリ羽ヲヲサストハ羽ヲカラ
スト云叟ナリ皆利用アリテ爲叟ニテ麁物ノ矢
ニテ不茹ト云ニハアラスト知ヘシ